

ておほせことあるあひだに、日はてりながら雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ひける、
春の日の光りにあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき
ふんやのやすひで

〔源氏物語桐壺〕此みこ源氏源氏むまれ賜ひてのちはいと心ことにおぼしおきてたれば、坊にもよ
うせずばこのみこの居賜べきなめりと、一のみこの女御はおぼしうたがへり、

〔伊勢物語〕むかし春宮の女御の御かたの花の賀に、めしあづけられたりけるに、略歌

〔玉勝間〕五 東宮の御息所

二條后は、清和天皇の中宮也、貞觀八年に女御となり賜ひ、同十年に貞明親王を生奉り賜ひ、同
十一年に其親王皇太子に立せ賜ふ、これ陽成天皇におはします、これよりして元慶元年に中
宮となり賜ふ迄のあひだ、女御にて皇太子の御母にましますを以て、東宮の女御とも、東宮の
御息所とも申けること、契沖が餘材抄、勢語臆斷などにいへるが如し、東宮の御母女御、御母御
息所といふことなり、

〔天和物語〕故式部卿宇多皇子敦慶 二條のみやすどころにたえ給ふて、又のとしのむ月のなぬかの
日に若菜奉り給ひけるに、

ふるさと、われにし宿の草の葉も君がためとぞまづはつみけるとありけり、

○按ズルニ、二條のみやすどころハ、三條のみやすどころノ誤ナルベシ、三條御息所ハ醍醐天
皇ノ女御藤原仁善子ニシテ三條右大臣定方ノ女ナリ、

〔天和物語〕桂の御子宇多皇女宇多皇の御もとに、よしたねが來たりけるを、母御息所き、つけ給て、門
をさゝせ給ければ、夜ひと夜たちわづらひてかへるとて、かく聞え給へとて、かどのはざまより
いひいれる、